

雇用創出

NPO法人 サトニクラス

月形町

1. 設立のきっかけ

NPO法人は平成24年に設立されました。もともとはひきこもりやニートの若者向けジョブトレーニングを実施する札幌のNPO法人が若者やホームレスを支援する事業所を月形に事業所をもっていましたがこの法人が設立されるきっかけで、後にサトニクラスの代表となる農業者が農業体験の受け入れ先となっていました。また同時期に近くの社会福祉法人で老朽化し使わなくなった建物を保存・利用したいという要望が住民からあがっていました。

この2つの動きが1つとなり、建物を借りて支援対象となる方たちの仕事先としての事業を実施することとなりました。仕事内容は代表となる農業者が大根の作付けをしていたこと、またその母親が漬物名人であったことから、身近にあるものでできる仕事として漬物づくりを行うことになりました。3名を緊急雇用創出事業を利用して雇用しましたが、事業期間終了後、人件費を支払うことができるほどの売り上げにはなっておらず、福祉サービス事業を開始することで雇用の継続を図ることになりました。月形町は福祉の町であることから福祉施設が多数あり、その利用者の日中作業の受け入れ先として就労継続支援A型事業所として平成26年11月に活動を始めました。その後も農村交流、農泊推進、農福連携などの各種補助事業を受けつつ障害者雇用を拡大しました。しかし職員の定年退職、多くの利用者の一般就労に結びついたことから人手不足となり、法人全体の事業内容を見直すことになりました。結果として令和2年から現在の事業内容となっています。

2. 組織形態・構成員

〔NPO法人理事〕：7名、〔会員〕：約80名、〔職員〕：3名

〔利用者〕：7名（定員15名：雇用されている障害者、町内・隣接市町村から通勤）

〔直売所出荷者〕：約60名

3. 現在の活動内容

令和4年度時点で、NPO法人内で大きく2つの事業を実施

【障害者就労支援A型事業所「サトニクラス酵房」】

漬物・味噌・米麴・乾燥野菜の製造販売が中心→地元および都市部の小売店で販売
漬物原料用野菜の自家栽培も行う。（約1ha）

〔その他作業〕

・農業者より農作業受託

（除草、播種、移植、田植補助、脇芽かき、片付け、収穫など）。

→近隣の農業者を中心に約7戸

・高齢者宅の福祉除雪

3. 現在の活動内容（つづき）

障害特性に応じて役割分担をしたチーム編成：さまざまな仕事を引き受けられる雪を利用した貯蔵をした大根での漬物加工など
→各種作業の組み合わせで通年での作業創出を実現

【花と野菜の直売所「花の里月形」】

〔営業時間〕：6月～10月 10:00～17:00

→月形町および近隣市町村の農業者が出荷して委託販売。（一部の商品は仕入）
直売所でも就労支援施設利用者の作業として袋詰め、値札貼りなどの作業

〔出荷者〕：経営移譲後の高齢農家が多い。

（直売所へのお荷が楽しみ、生きがいという人もいます。）

〔場所〕：月形皆楽公園内の建物内で営業

→農産物に加え手芸雑貨や刑務所の作業製品、薪、炭、網などのキャンプ用品など

〔利用客〕：期間中にのべ15,000名ほど。

→快楽公園内キャンプ場利用者や札幌圏からの観光客など（常連客も）

4. 活動資金

〔収入〕：一番大きいのはA型事業所を運営するという福祉事業としての収入

〔支出〕：支出のかなりの部分は利用者・職員を中心とした人件費

→ここ数年は収支がほぼ均衡している状態。それ以前は赤字。

5. 活動を続けていてよかったこと

ものをつくり、売ることに楽しみを感じながら仕事をしています。わかりやすくお客さんの役に立っている仕事をしていることを実感できます。お客さんや出荷者、取引先のみなさんとの会話といった交流も喜びの一つになっています。NPO法人の会員に加えて、直売所の出荷者も地域内で支えてくれる存在になっています。大雪で被害を受けたビニルハウスの再建を無償で援助してもらったり、お金には代えられない結びつきとなっています。

6. 今後の目標・見通し・課題

少しずつ取組を大きくしていきたいと考えています。障害者の特性もあり急には事業規模を大きくできません。これまでは人を増やしてから事業を拡大してきたが、収益的には人件費の負担が大きくなってしまっていました。やや人手が足りないくらいでも、利用者にとってはやりがいにつながっていたり、残業での収入にもつながっていて悪い面だけではないと思っています。

・設立当初から現在の形を明確に意識して活動を行ってきたわけではありませんが、その時その時にできることをしてきた結果が現在の形になっていると思われます。状況に合わせて変化していくことも継続的な活動にとって必要だということが窺えます。

雇用創出

ぽぽんた市場

むかわ町

1. 設立のきっかけ

現在のむかわ町へ合併する前の平成15年に開設しました。当時は道の駅へ直売所が併設されることが全国的にも広がった時期であり、鷓川町（当時）にも特産物があるということで、道の駅の近くの場所へ町が直売所を設置しました。直売所の開設以来、指定管理者を出荷者団体である「ぽぽんた市場運営管理組合」が引き受けています。この管理組合は直売所設置に併せて結成された組織です。

2. 組織形態・構成員

[組織形態]：任意団体
[役員]：代表1名、副代表1名、理事3名、監事2名。（任期2年）
[会計年度]：1月～12月（2月に総会）
[店舗従業員] 10名（役場職員08：店長の役割、レジ担当8名、清掃担当1名）
レジ担当はシフトを組んで運営しています。また、レジ担当のうち5名は直売所で委託販売をしている水産加工会社からの派遣です。
[会員] 正会員29名、準会員40名。（結成当時は約30名）
会員は在住し町内で生産・加工をしている人という条件
正会員29名のうち農業およびその加工品が26名、漁業およびその加工品が3名
大部分はいわゆる普通の農家です。高齢化は進んでいるものの、農家後継者や新規参入者の会員・準会員加入はあり、次の世代の加入におけた声かけもしています。
正会員と準会員は委託販売の手数料が異なります。
準会員は組合運営へ携わることはなく、委託販売の部分だけで関わっています。
多くの準会員は比較的高齢で、出荷量も少なめの人が多い状況にあります。例えば山菜だけをその時期に1～2ヶ月間だけ出荷する人などが準会員として参加しています。

3. 現在の活動内容

直売所での農産物・水産物およびそれらの加工品の委託販売を行っています。
[営業期間]：通年営業（年末年始を除く） 10：00～17：00
4月から12月までは直売所内で食堂も営業
春からレタス、イチゴ、6月下旬ころからはすいか、穂別メロン、秋にはししゃもがメインの商品となっています。



[写真] 施設外観



[写真] 水産物売場

3. 現在の活動内容（つづき）

かつては年2～3回イベントがあり、出荷者自らお客さんに販売する機会がありました。平成30年の北海道胆振東部地震、令和2年からのコロナ禍、その間にも進んでいた高齢化などの影響でイベントは減少しています。令和4年は町内の関係者が集まって秋に開催される鷓川ししゃも祭りの時期にあわせて直売所のイベントを実施しました。また年末の感謝セールはこの間も継続して実施してきました。この時には餅つきや餅の予約販売もしています。

利用者は地元客と観光客の両方がいます。観光客は多くは札幌圏から来ているようで、定期的に通ってくれている人もいます。客数はゴールデンウィークあたりから秋にかけての時期が多く、1～3月は少ないです。

4. 活動資金

〔収入〕：委託販売の手数料が基本的な収入源

建物自体を指定管理で引き受けている以上の役場からの補助はありません。

〔支出〕：人件費・光熱費がメイン。年間で2400万円程度。

コロナ禍にあっても以前から黒字部分を積み立ててきた基金があったこともあり、維持することはできています。ただしもう2～3年続くとなるとなんらかの対策が必要になってくると見込んでいます。

5. 活動を続けていてよかったこと

直売所開設時の会員が現在もほとんど残っていますが、これは生産したものを直接消費者に届けられる喜びが大きいからだと思います。商品の補充の際には消費者と食べ方などについてコミュニケーションをとることができますし、会員同士も出荷時に顔を合わせて会話することが楽しみになっています。

6. 今後の目標・見通し・課題

目標としては会員さんが出荷を継続できるように直売所自体を継続していくことです。

そのためにも新規の会員さんの加入は呼びかけていきたいと思っています。またコロナ禍の影響もあり、売上が減少していることも課題です。この対策の1つとして従来現金だけだった支払方法についてクレジットカードも含めたキャッシュレス決済も令和4年の年末に導入しました。手数料はかかるものの、思ったより利用はあるため、継続していけそうだと感じています。また同時期にインターネット上での販売を行うECサイトも立ち上げています。そこでの売上だけでなく実店舗の宣伝にもなればと思っの取組です。

・比較的積雪が少なく、また農産物だけでなく水産物もあることから通年での営業が可能となっています。これにより地元客が普段から利用できる店舗となっています。

雇用創出

NPO法人
福祉サポートきらきら本舗

訓子府町

1. 設立のきっかけ

障害を持つ子供たちの生活の向上を目指し、昭和60年に訓子府町の保健師が4組の親子が集う会を立ち上げ、地域で適切な療育や教育を受けながら子育てができ、社会参加もできるようにと活動を始めました。この活動を「たんぽぽ親の会」と命名し、地元でのコンサートの主催や、道内あるいは全国の同じような取組みをする仲間との交流の機会を通じて活動の幅を広げていきました。

平成11年には町内の住宅に障害を持つ人が集える場として「リハビリハウスほんわか堂」を開所し、自主運営で手芸や軽作業、文化活動などを通じた療育と共同作業所の立上げにも取組み始めました。

平成13年には訓子府町役場の新庁舎内に喫茶「たんぽぽ」が開設され、そのスペースを訓子府町から借用し、共同作業所と位置づけました。

平成18年には障害者自立支援法の施行による福祉政策の変更を受けて、NPO法人福祉サポートきらきら本舗を立ち上げるとともに、「リハビリハウスほんわか堂」を「わたぼうし」と改名して運営を開始しました。

2. 組織形態・構成員

〔法人役職員〕：5名

〔就労支援施設利用者〕：合計12名（定員20名）

3. 現在の活動内容

障害児を持つ親の会としての立ち上げから、地域共同作業所、そして法人化した施設へと体系を変えながら「生活の場」、「就労の場」、「活動の拠点」として活動を続けています。

【就労継続支援B型事業所「わたぼうし」】

〔単身高齢者等配食サービス〕：訓子府町からの委託事業

・提供日：毎週月曜日・水曜日・金曜日の夕食 年間約140日

栄養バランスのとれた食事を利用者宅へ配達しています。

配達に併せて利用者の安否を確認し、健康状態等に異常があった場合は関係機関等への連絡も行っています。毎回30食前後の利用があり、町内隅々まで配達しています。

3. 現在の活動内容（つづき）

〔農産物生産・加工〕

30aほどの圃場を有しており、そこでは有機低農薬栽培にこだわった赤シソ、ビーツ、スイートコーン、小松菜、大根などの園芸作物や大豆、小豆、金時などの豆類を生産し、大豆は味噌へ、赤シソはジュース「むらさきしきぶ」に、ビーツはジャムに加工もしています。これらの農産物および加工品は町内のイベントやインターネットを使った販売、町のふるさと納税の贈答品、喫茶「たんぽぽ」での食材に供しています。

〔各種授産品作成・販売〕：作成した刺し子布巾、編み物、小物等の手芸品などは、喫茶「たんぽぽ」や町内のイベント、お祭りなどへの出店時に販売しています。

〔バイオ福祉再生油事業〕：廃てんぷら油を集めて再生重油とする工程の一部を担い社会経験を積んでいます。

【喫茶「たんぽぽ」】

訓子府町役場庁舎内で喫茶および食事を提供

〔営業時間〕：月～金（祝日は休み） 11：00～15：00

運営にあたっては「わたぼうし」で接客訓練を受けたり、配食サービスで自信をつけるような準備がなされます。

4. 活動資金

〔収入〕：利用者受け入れに伴う国からの給付金、喫茶「たんぽぽ」の運営収入、配食サービスの受託収入、農産物や加工品の販売収入など 年間2,000万円強

〔支出〕：スタッフの人件費、利用者への作業報酬、売上原価など

〔収支〕：概ね均衡した状態で推移しています。

コロナ禍においては町内のイベントが中止になり、売上げに影響が出ました。

5. 活動を続けていてよかったこと

施設を明るく、楽しく、健やかに、一生懸命をモットーに運営することにより、障害を持つ方々が生き生きと社会参加する機会を保ち続けています。特に、訓子府町の環境を生かした農作業や加工品の製造などは障害の程度や作業能力に応じた就業機会を拡大するとともに、生産物、加工品の販売に伴って工賃も向上しています。

6. 今後の目標・見通し・課題

現状、障害者には国からの年金が支給されていますが、それと合わせて一定の地域生活が送れるような利用者への工賃の確保を目指しています。できる範囲で共同作業の幅を広げながら利用者の受入れも図って行く一方で、持続性のある活動とするためスタッフの待遇改善にも配慮する必要があります。

・障害者も地域で社会参加する機会を持ちつつ生活を送るために、重要なことは長期にわたって活動が続くことです。そのためには組織の収支・スタッフのモチベーションなど多岐にわたる要素の検討が求められます。

雇用創出

株式会社CheerS

士幌町

1. 設立のきっかけ

士幌町においても人口減少、高齢化の課題は大きくなっていったため、平成30年ころには

①基幹産業である農業や食を通して、新たな農業の展開、農畜産物加工・特産品開発、観光交流人口の創出、町の将来を担う人材育成

②士幌町への移住促進業務を強化すべく、移住・定住相談、観光窓口等の一本化といった計画が立てられていました。

そのような時期に国の地方創生推進交付金があり、これを活用し、士幌町が主体となりつつ地元企業・団体・個人有志の出資による第3セクター形式で町の活性化に挑む会社として株式会社CheerSが設立されました。

2. 組織形態・構成員

〔役員〕：代表取締役1名、取締役6名

〔職員〕：チームリーダー1名、職員2名、パート1名、地域おこし協力隊1名
計5名

3. 現在の活動内容

【移住・定住促進業務のワンストップ窓口】

移住・定住相談（役場では担いきれない日常生活のサポートを実施）

短期移住体験用住宅2戸、長期移住体験用の農園付き住宅4戸（畑は30坪ほど）
の管理

→町役場から委託された業務として実施（一部業務は休止中）

【加工研修施設「しほろキッチン」運営】

主に使用する農畜産物ごとにゾーンが分かれ、そこに様々な調理器具が用意されています。

また、プロジェクターやスクリーンを備えたパーティールームもあり、食品加工以外の用途にも利用できます。

〔利用料金〕：基本利用料（町民275円/人）＋加工室等利用料（町民825円/半日～）＋電気代・ガス代等実費

町内にある飲食店・食品加工製造事業者の商品開発の初期段階のテストにも活用。

【6次産業化支援、地域特産品開発・製造・販売業務】

〔6次産業化支援〕

町内の酪農家がしほろキッチンを利用した研修を受け、農家レストランを設立し、自主生産の生乳で製造したチーズを活用したオリジナル「ピザ」の開発へと繋がっています。

3. 現在の活動内容（つづき）

〔地域特産品開発・製造・販売業務〕

町内には会社設立以前から農商工連携として継続してきた歴史があり、そこで士幌町の農畜産物が活用されてきました。

その1つの例がシーベリーという士幌町で栽培されている栄養価が高く機能性の高い小果樹の活用です。この果実を使ったソーダや「ベリから」といった辛味調味料が士幌高等学校生と連携して開発されています。これらの商品をOEM製造しCheerSが町内道の駅やオンラインショップなどで販売しています。

【農業の担い手不足対策への寄与】

主に士幌高校と連携した人材育成が中心
食品加工研修や食育の場の提供、カリキュラム作成、実施と取り組んでいますが、人員不足などもあり苦勞しています。

4. 活動資金

〔資本金〕：1,000万円（町が1/2を出資。JA、商工会、及び個人が残りを出資）
設立以来、黒字収支での経営を続けています。

5. 活動を続けていてよかったこと

地元の士幌高校生と連携した商品開発をすすめるなど、若者の成長を支援する取り組みは会社のなかでも大きな位置づけをしています。以前実施した人材育成の取り組みでは関西大学の学生を受け入れる農業インターンを実施しました。農場での馬鈴しょ収穫作業、酪農の生産から加工、販売を学んだほか、農業現場でのIT（情報技術）活用事例として搾乳ロボットの見学などを体感し、参加した学生からは「本州では、農業に対して、所得が高くなく作業がきついなどあまり良いイメージが持たれていないが、士幌町は農業の先進地で所得も高く、スマート農業が進んでいる現状や体験したことを多くの人に伝えたい」との声を聞き若者が地域社会とかわりながら挑戦をしている姿を見ると嬉しく、また日々成長していく彼等のことを頼もしく感じています。

6. 今後の目標・見通し・課題

士幌町産の農畜産物を使った様々な加工品の開発・商品化、およびその活動を通じたひとつづくりを継続していきたいです。

また実際の製造販売を通じた収益によって得た収益を地域内で循環させるというビジネスモデルを積極的に展開していきたいです。課題としては、人員不足が大きな課題です。中でも専門知識や能力が必要である人材育成業務が困難となっています。

・会社設立の背景に人口の減少があり、移住、定住の促進へと目的は繋がっています。農業の魅力や農産物加工における発信など他地域の参考になる事例だと思われます。

雇用創出

一般社団法人 音別ふき落団

釧路市

1. 設立のきっかけ

炭鉱や農林業で栄え、昭和44年には8,000人を超えていた音別町の人口が平成27年には2,000人を割り込むこととなり、町に活気を取り戻そうと結成されたのが一般社団法人「音別ふき落団」です。代表は釧路市内での看護師を退職後、音別町に移り住み、地元特産の落が消失する危機にあることを知りました。そのころ、一般社団法人釧路社会的企業創造協議会の活動に参加するなかで、障害者や引きこもりなどの自立支援の取組みの必要性を感じ、地元の資源としての落の維持と落による地域おこし、さらには生活困窮者の自立支援を目指して「音別ふき落団」を立ち上げました。団名も代表の命名によります。「ふきで音別町が有名になり、若い人から年配の方までどんな人も自信を持ってイキイキと暮らせる」というビジョンを掲げています。

2. 組織形態・構成員

[ふき落団中心メンバー]：3名（代表と元農業者2名）

[生産・加工などの作業担当]：6名（いわゆる生活困窮者を雇用）

[除草作業などの補助作業]：数名（地元障害者施設から雇用）

生産・加工などの作業担当の6名は活動期には土日祝日を除いた毎日、釧路市内から小1時間かけて通っています。また、加工品開発、包装資材のデザインなどはふき落団の活動に賛同してくれた道内外の企業・団体の協力を得ています。

3. 現在の活動内容

地下茎で成長する落の栽培は4月に始まり、早ければ5月から7月に収穫を迎えます。収穫後、生落での販売と並行して塩蔵加工品の製造や販売を行います。生落は地元にとどまらず、人を介して紹介された九州や西日本の「グリーンコープ生活協同組合」の宅配販売品にも採用され販売が拡大しています。

新しい落の食べ方にこだわる代表の思いから、小ぶりながら食感が良い二番落を使ったピクルスのレシピを考案し、釧路市内のレストランでの加工製造やラベルのデザイナーの協力を得て「瑞音」として商品化し、3年目の令和4年産は250瓶を製造し完売しました。さらに、厚岸町で手に入る昆布と合わせた佃煮やさらなる加工品の開発にも意欲的に取り組んでいます。

3. 現在の活動内容（つづき）



[写真] 加工場



[写真] 露のピクルス「瑞音」と佃煮

4. 活動資金

[収入] : 生露、加工品の販売収入、生活困窮者の雇用場としての補助金

[支出] : 主に人件費

(無農薬・無化学肥料にこだわっているため人手による作業が多い)

原料となる露の生産に限界があることから販売を見込める量に加工を調整しています。

5. 活動を続けていてよかったこと

3人の中心メンバーの努力により、種から育てる露の栽培が無農薬・無化学肥料で続けられています。畑作業や加工においては釧路社会的企業創造協議会の活動を契機として協力してくれることになった6名のメンバーが中心であり、生活困窮者の働く場として双方にメリットあります。また、加工品の開発に協力してもらいながら、ピクルスや佃煮といった従来にない新しい露の食べ方の提案ができています。

6. 今後の目標・見通し・課題

現状、露の生産、加工品の製造・販売が終了した秋以降には協力してくれる生活困窮者の活躍の場がありません。今後さらに、加工品の開発に努め、協力者の雇用期間の延長に結び付けたいと考えています。

・種から育てる露の無農薬・無化学肥料栽培は除草などたいへんな労力を要しますが、有機農産物へのこだわりから西日本の消費者にも評価されています。みどりの食料システム戦略が進められる今後、新たな加工品の開発や販売と連動した生産の拡大が重要になると考えられます。

雇用創出

NPO法人美しい村・鶴居村観光協会

鶴居村

1. 設立のきっかけ

鶴居村は酪農が盛んで、良質な生乳生産と自然環境に調和したクリーン農業を実践しています。平成14年に高品質な生乳や牛肉の認知度向上のため、加工品の開発、実習・体験施設として「酪楽館」を開設しました。釧路湿原やタンチョウの生息地でありながら、宿泊施設が少なく通過型の観光地であったことから、平成16年には酪農家が中心となってグリーンツーリズム組織「鶴居村めぐりねっとわーく」を発足し、酪農体験や農泊の取組みを始めました。このことによって食と自然に恵まれた鶴居村の魅力を知らせてもらうこととなり、地域を挙げて滞在型観光に取り組む契機となりました。平成19年には鶴居村観光協会に「地域づくり型観光調査研究委員会」を設置し、翌年「日本でもっとも美しい村」連合に加盟、観光協会は平成24年9月に「NPO法人美しい村・鶴居村観光協会」として体制を強化しています。

平成27年には鶴居村が「鶴居村観光振興ビジョン」を策定し、観光協会を中心に村が一体となって地元の観光資源を活かした鶴居村ならではの滞在型観光スタイルの推進に取り組んでいます。

2. 組織形態・構成員

【役員】：理事10名（うち1名が事務局）、監事2名

【加盟団体】：68団体（地元の飲食店やホテル、農業・商工業などの関連団体など）

3. 現在の活動内容

鶴居村で「景観・食・体験・交流」を楽しむ

【景観を楽しむ】

徒歩で草原や林道を歩いて体験するフットパス

電動アシスト自転車で釧路湿原や摩周方面をサイクリング など

【食を楽しむ】

酪楽館チーズ工房のナチュラルチーズ製造

農村レストランでの地元の素材を使った「鶴居のむらレシピ」、「鶴居村の地元食」の提供鹿肉ジビエ料理なども加えた「ガストロノミーツーリズム」、地ビール・ワインの醸造 など

3. 現在の活動内容（つづき）

【体験・交流の楽しみ】

酪楽館でのチーズ作りや食肉加工体験
SNSなどによる台湾やタイ、ベトナムなどへの情報発信
農場での労働の引き換えに滞在を楽しむWWOOFの受け入れ
子連れワーケーションで子供との農業体験
温泉やウェディング、キャンプといったコンセプトツアー など

（添付写真）

中核となるファームレストラン「ハートンツリー」の外観と、地元産物にこだわった彩り豊かなお料理



ファームレストラン「ハートンツリー」



〔写真〕 建物外観



〔写真〕 地元産物にこだわった料理

4. 活動資金

〔収入〕：加盟団体からの会費、特産品などの販売収入、村・各種団体からの補助金・助成金→年間約1,600万円

〔支出〕：農泊・ワーケーション事業、インバウンド受入れ事業、地域観光推進事業など

〔収支〕：若干の繰越しを確保

5. 活動を続けていてよかったこと

宿泊施設や農泊体験の機会が増え、滞在型の観光客が着実に増えてきました。

観光客数 平成19年度19万人→平成30年度35万人

宿泊者 平成19年度6千人→平成30年度1万4千人

鶴居村の人口の社会的増減では平成23年以降、転入超過の年もあり、人口減少に歯止めをかける効果も見られています。

6. 今後の目標・見通し・課題

写真をふんだんに使ったガイドブックやSNSなどの活用により鶴居村の魅力をリアルに紹介し、コロナ禍で減少した国内外からの観光客の回復が喫緊の課題です。農村ならではの魅力をいかにPRするかが重要で、まずは一度訪れてもらうことがポイントだと思っています。

・観光協会事務局が打ち出す「地元の観光資源を活かした鶴居村ならではの」という方向性に村を挙げて参画しており、今後も新しいメニューが期待されます。